研究成果を世界に広めよう
第３回

金谷健一
岡山大学

どこで発表するか

現在，私の論文を査読して評価してくれるかなりの人は，私がかつて訪問した人や私をかつて訪問した人であるに違いないと信じている．また，そういう人は私の研究を知っているから私の論文を引用する．その結果，彼らの論文が私に査読に回ってくる．そして私がそれを評価する．こうして研究の理解者が増殖する．

このように研究の評価は人間関係に依存するところが大きいので，学会や論文誌に投稿するときは，自分が知っている人，自分を知っている人，評価してくれそうな人がいる学会や論文誌を選ぶことが大切である．

最近，国際会議の CFP(= call for paper) や論文誌の論文募集のメールが非常に多く飛び交っていて，中には自分の研究テーマによく合うように見えるものもあるであろう．しかし，組織委員会や編集委員会の構成をよく見て，知らない名前ばかりだったら止めた方がよい．落ちるかも知れないし，通っても，実績作りのために何でも通しているのかも知れない．そんな所で発表しても意味がないし，その後の活動につながらない．

やはり，自分はここと決めたところに継続的に投稿するのがよい．その会議や論文誌の常連メンバーと人間関係を築くことが大切である．落されたから別の所を “試す” という態度はよくない．前にも述べたが，研究の評価は “運” ではない．自らの努力によって得るものである．

発表の場を自ら作る

しかし，どうしても評価される望みがなければどうすればよいであろうか．その場合は「自分で発表の場を作り出す」ことである．具体的には，自分の研究に関心のある人達に呼びかけて，自分達でワークショップを開催するのである．

現在はそれが可能となる機会が非常に多い．例えば ICCV，ECCV のような大きな会議はワークショップの募集があり，採択されやすい．そのようなワークショップでは自分達同志で査読ができるし，自分達の望む人を招待することもできる．そしてそのプロシーディングズを出版社から書籍として発行したり，既存の論文誌に特集号として掲載することもできる．私もそのような活動によく参加している．

そのような国際ワークショップ開催のために科研費や学術振興会や民間財団の助成を申請してもよい．最近では個人への研究助成よりもそのような企画のほうが助成を得やすい傾向にある．私も何度か自分で企画して実行したことがある．私が評価する人を招待して開催すれば，またそのような人は私を評価してくれる．このようにして研究仲間の輪が広がる．

そのようにして同好の仲間が集まれば，自分達で新しい学会を作ることもできる．それが大きくなれば，自分達で論文誌を発行することもできる．私も最初は科研費による集会だったものを発展させて，やがて論文誌を発行するようになった学会の設立に関わった経験もある．そ

のような活動を通して自分達の研究が多くの人に認知され，既存の学会や論文誌に採録されるようになることも多い．

英語によるコミュニケーション

このように研究の輪を世界に広げるキーポイントはもちろん英語によるコミュニケーション能力である．そして，これが日本人研究者にとっての最大の障壁である．

新聞などで報道されるどの調査によっても日本人の英語力は先進諸国はもちろん途上国と比べても最低に近い水準である．これが日本の科学技術の情報発信に非常にマイナスになり，日本でなされた先進的研究成果が英語による発表のまずさによって外国に十分伝わらなかったり，後に同様のことを行った外国の研究がより注目を集めたりすることもある．

さらに今日これがより深刻である．それは世界中の研究の進展速度が急激に加速しているからである．どの分野でも毎年いくつもの国際会議が世界中のどこかで開かれ，その結果はすぐに世界中に広まり，数ヶ月後の会議でその発展版が発表されたりする．このため，論文が論文誌に印刷されて配布される頃には内容が既に古くなっていることが多い[注 1)]．

その結果，論文誌は過去の成果の記録としての意味しかなく[注 2)]，最新の成果のソースとはなり得ない[注 3)]．だから，世界の研究の進展についていくにはそのような国際会議に出席したり，海外の研究活動に参加したり，研究者間の交流を深めたり，相互訪問を行ったりしてリアルタイムで情報を交換しなければならない．それには英語による，特に口頭でのコミュニケーションが不可欠である．

英語による口頭発表の問題点

日本人が国際学会で発表するときの問題は，発表そのものは原稿を読むか丸暗記してしゃべり，（文法や発音の誤りが多くても）何とか無事に済ませたとして，その後の質疑に対応できないことである．質問者が何を言っているのか分からない，分ってもその返事を英語でどう言えばよいか分からない，そのどちらかで（ほとんどは前者）立ち往生する．外国人の中には発表の英語がまずい日本人には何を質問しても無駄だと察知する人も多く，会場が静まりかえることがある．

そういうとき，I am sorry I am not good at English. などと事もなげに謝る日本人もいる．大したことはないという口ぶりである（自分はこんなによい研究をしたのだ，英語ができないことぐらい些細なことだ，私は日本人だから英語が下手なのは当然だ[注 4)]）．

私も初めての頃は内心そのような気持ちが少しはあった．しかし，これは事の重大さを理解していない証拠である．何度も強調するように，研究は人に伝えて初めて意味をもつ．伝わらないのでは何もしなかったと同じである．研究を人に伝えられないのは研究者として自己否定である．

英語上達の努力

例えばアメリカにも日本人と同じくらい英語が下手な留学生や外国人研究者が多く住んでいる．彼らの発音は悪くて（正しくは「非標準」で）聞き取りに苦労する．しかし，彼らは決して謝りはしない．コミュニケーションの重要さを理解しているからである．謝るのは自己否定であり，コミュニケーションできなければ何も残らない，自分の生活が維持できない．だから，下手な英語で懸命の説明をする．質問が理解できなければ何度も問い直す．とにかく何かを答えようと必死になる．

どうも日本人の心の底には安易な気持ちがあるのではないか．自分は国内の学会でよく発表

している，自分の研究は国内で高い評価を受けている，和文論文誌[注 5)] にも論文を発表している，外国の論文誌も読んでいる，英語が話せなくても学者として社会的に尊敬を集めている，...

しかし，今日はグローバル化の時代である．研究はもはや国ごとに独立には行えない．外国との緊密な交流と連携が必要である．そして，どの国も同じ基準で，したがって同じ言語（実質的に英語）で競争しなければならない．

大学を卒業した日本人は，自分は（中学 1 年から数えて）10 年も英語を勉強したのに満足に英語が話せないとがっかりする．ある人はそれが自分が無能のせいだと自信を喪失し，ある人は日本の英語教育が悪いと非難する．どちらもそれ以上に努力しないよい口実になる．しかし，実際はどちらでもない．

真相は **10 年程度では英語は話せるようにはならない**[注 6)] ということである．私は 20, 30 代に懸命に英語を勉強した．英字新聞や英語の雑誌（特にコラム記事のような口語英語）を辞書[注 7)] を引き引き懸命に読んだ．

国内でも国外でも機会を逃さず，可能な限り英語を話す場を求めた．特に外国人の講演会やセミナーには積極的に参加し，必ず質問をした，というより質問するために聞きに行ったともいえる．だから，講演中にここを聞いてみようという質問項目をメモしていた．なみじのないテーマでどうしても講演内容が理解できないときは，仕方がないから,「この講演に関係するかどうかわからないが，私はこれこれのことを聞いたことがある．これをどう思うか」のように強引に自分の土俵に引きずり込んで，ともかく英語で質問した．

家ではラジオ，テレビ，フォノシート，レコード，テープなど可能なメディア[注 8)] をすべて利用して練習した[注 9)]．それでも，英語での発表がスムーズにできるようになったのは発表回数が 10 回を超えた頃であった．そして，日常会話を含めて自分が満足できる水準に達したのは，私が 40 才を過ぎてからだった．現在でも衛星放送の BBC や CNN を毎日聞き[注 10)]，英語の古典文学や現代文学の名作の朗読テープや CD を書店で買って来て聞いている（インターネットでも購入できる）．私の経験では，英語を不自由なく聞き，話せるようになるには 30 年はかかる．まだまだあきらめてはいけない．

研究者をめざすには

日本では学生が博士課程に進学して研究者の道を志す主要な動機に，会社生活が嫌いだという理由が多いように思える．会社では人間関係が緊密でわずらわしい，人と人との交渉が多くて苦手だ，研究生活なら物 (計算機，装置，紙，鉛筆，...) を相手に心静かな生活ができ，教室で教えること，学会で発表すること以外は人にわずらわされることもない．...

しかし，このような人は最も研究者に向いていない人である．かつて，大学を卒業して会社に行った人が博士課程に入学し直したいといって受験した人を私が面接した経験がある．そのときもそのような理由だった．会社では上司に気に入られないと評価されない，評価が恣意的である，顔色伺いが必要である，それに対して研究者は成果が公正に客観的に評価される，そういう生活が好きだということである．

やはり，コツコツと研究に打ち込めば自動的に評価されると思い込んでいるようである．評価を勝ちとるのも自分の仕事で，それは人間関係に基づくということを十分に認識していない．研究者とは製造業者とセールスマンを兼ねた存在である（やがて経理や管理や組織運営もするようになる)．これに対応できない人は研究者

に向いていない．現状では日本の研究者の多くがこのような性格的に向いていない人で占められているのではないであろうか．これも日本の科学技術が世界に認められにくい要因の一つではなかろうか．

アメリカではよく知られているように，大学院生の圧倒的多数は留学生である．彼らが研究者を志すのは，それ以外に進出できる職場がほとんどないからである．だから競争が激しい．実績が評価されなければ生活基盤が築けない．評価を勝ちとるのは自分自身でしかないことを理解しているから，何事にも積極的である [注 11]．英語が下手なことも努力で克服しようとする．

これからの研究者

今日は日本人研究者には受難の時代である．かつては日本の研究者は外国の文献さえ読めればよかった [注 12]．それを応用し，改良し，役に立つ物やシステムに仕上げればよかった（日本の企業はそれを外国に輸出して日本は今日の経済大国になった）．研究成果は国内の学会で発表し，和文論文誌に投稿すればよかった．それが研究業績となり，昇進し，高い地位につける．日本の大学では定年まで保障される．例え英語が一言も話せなくても教授になれる．そして社会的に尊敬を集められる．

しかし，これからはそうはいかない．大学は独立行政法人化され，企業は容赦ない国際競争にさらされている．研究者といえども安住できない．激しい競争にさらされ，自分の道は自分で切り開くしかなくなった．世界が共通の舞台となり，同じ条件で，同じ言語で活動せざるを得ない．これから研究者をめざす者はその覚悟がなければならない．

注 1) 画像関係では投稿論文数が著しく多いためか，採録されても投稿から出版まで 2, 3 年かかる．私の論文で 5 年かかった例もある．

注 2) ただし，それによって就職や昇進や研究費申請が大いに左右される．

注 3) 日本を含めたアジア諸国で，ときどき論文誌だけを参照してそれを改良するとする論文を投稿され (例えばオプティカルフロー検出の Horn-Schanck 法の改良)，何と時代遅れと査読者あきれさせることがある．

注 4) 初めてアメリカに行った人で，英語が話せることが当然視され，容赦なく英語で話しかけられて，自分は日本人で英語が下手なのは当然なのに日本人に対する思いやりがないとショックを受ける人が多い．一方，私はアメリカで日本人である私が英語を話しているということを意識してもらえない．あんなに苦労して勉強したのに...

注 5) 数学や物理や化学では論文は英語が普通だが，電気電子，情報，通信関係では和文誌が未だに幅を利かせている．外国人に知らせるほど価値がないから日本語で書くのか，英語で書いたのでは日本人が読みにくいので国内で評価されにくいということなのか，あるいは単に英語が書けないということなのか．

注 6) 外国，特にヨーロッパで英語を話せる人は 5, 6 年しか “学校” では習わなくても，それ以外で英語に接する機会が多いから，実質的には 10 年以上の経験に相当する．日本で週に 1, 2 時間の授業を 10 年受けても 4, 5 年の経験にもなるかどうか．

注 7) 辞書は重くて持ち運びにくく，ページをめくるのに時間がかかり，よごれたりしわになって非常に不便だった．現在の電子辞書は夢のようだ．あれが昔あったらどんなに便利だったか．

注 8) フォノシートとはビニールでできたレコードであり，現在はレコードとともに絶滅種である．当時はビデオや CD や DVD は存在しなかった．DVD とは何と便利なものができたものだ．昔あればどんなによかったか．

注 9) しかし，民間の英会話学校には行ったことがない．私は勧めない．時間と金の無駄である．

注 10) 私が契約してるスカイパーフェクト（“スカパー”）ではいくつかの英語放送局（BBC, CNN を含む）の「英語セット」が格安で，個別に契約するより得である．

注 11) 日本の囲碁界や相撲界で外国人が日本人より強いのは，日本人のように単に好きでやっているのではなく，日本での生活のすべてがかかっているからだと言われている．

注 12) 私が以前に大学院入試の工学部共通英語問題作成に携わり，それまで中心だった和訳問題を止めてコミュニケーション能力を問う問題にしようと提案したとき，大学院で必要なのは英語論文を読む力である，コミュニケーション能力は必要ないという強い反対にあった．それは主に機械や土木のような国内産業を背景とする学科であった．